

講座	<b>2019 冬大会 in 神戸 講座案内</b>	
<b>A</b>	<b>めっちゃこだわる教材研究①</b>	<b>牧野 満 (大阪)</b>
	私はよく「ひねくれている」とか「素直ではない」とか「物事を斜に見ている」とか言われますが、そのことが実践に表れているのかもしれない。「めっちゃこだわる教材研究」というたいそうな講座を任された訳ですが、私はこれまでにやってきた実践をそのまま語ることしかできません。それがこだわりにあたるのかどうかは分かりませんが、力を入れてきた水泳を中心に、リレー、車いすバスケット、マットなどの実践について、お話を聞いて頂ければと思っております。	
<b>B</b>	<b>めっちゃこだわる教材研究②</b>	<b>平野和弘 (埼玉)</b>
	水俣病を撮り続けたユージン・スミス生誕 100 周年の写真集に、青柳は次のような文章を寄せています。「日本社会全体が見て見ぬふりをしてきたとき、水俣という現実が厳然とあることを私たちに突きつけてくれた」と水俣病から様々なことが見えます。そして、子どもたちにたくさんの方のことを考えさせられる内容と方法論が詰まっています。見て見ぬふりはできません。子どもたちに伝えたい中身がここにあります。	
<b>C</b>	<b>からだを知る！素敵な保健の授業</b>	<b>鎌田克信(宮城)</b>
	「インフルエンザにかかると、どうして急に熱が上がるの?」「骨折してもなぜ治るの?」子どもたちは、からだについてたくさんの疑問をもっています。どのように問いかけ、どのような教具を使うことで子どもたちの疑問を引き出し、からだのすばらしさを納得しながら学ぶことができるのか、考えてみましょう。また、簡単な教具づくりの実習も行います。子どもたちの驚く顔と笑顔を想像しながらつくる楽しさも味わいましょう。	
<b>D</b>	<b>目の前の子どもから創る障がい児体育の授業</b>	<b>辻内俊哉 (大阪)</b>
	障害のある子どもたちが目を輝かす瞬間、それは「えっ、すごい」「やってみたい」という文化(活動)と出会ったときです。日々たくさん発信している子どもたちのサインを受け止めながら、子どもたちの思いや願いに寄り添った障害児体育の授業について考えます。	
<b>E</b>	<b>学級づくり・学校づくりと体育</b>	<b>制野俊弘 (宮城)</b>
	若い教師たちを中心に、「学級経営がうまくいかない」「学校づくりができない」などの悩みが蔓延しています。一方で、「民主的な実践は、民主的な学校から生まれる」と言われると、悩みはますます深くなります。この講座は、そんな苦勞を抱えている先生方の切実な声によって開講されます。学級や学校は「畑」、体育は「種」、育つのは「子ども」です。この三者の関係がどう関わっているのか、その具体的な実践についてお話します。たのしい体育・スポーツ 2019 年秋号を参照。	
<b>F</b>	<b>自主・自立・自治と俺らの部活動</b>	<b>松宮俊介 (滋賀)</b>
	教育としての部活動は可能か—この講座は、私自身の部活史と教員になってからの部活指導史を振り返り、スポーツの論理(勝利を目指すこと)と、教育の論理(子どもを育てること)の間で起こる葛藤を中心に、語ってみたいと思います。部活動を担当する教師の、リアルな悩みとそれを乗り越えるヒントを皆さんで考え合いたいと思います。	
<b>G</b>	<b>若手企画① 平和教育とスポーツ</b>	<b>澤 豊治 (滋賀)</b>
	体育科が戦前戦中どのような役割を果たしてきたかにも触れながら、平和と平和教育を子どもとともに考えながらすすめてきた平和教育実践や、その取り組みを構想し準備し実践する中で体育教師自身の思想や価値観、そして保健体育の授業がどのように変容してきたのかを伝えたい。またこれからの学校における平和教育の意義、意味について参加者と考えていきたい。	
<b>H</b>	<b>めっちゃこだわる教材研究③</b>	<b>岡崎太郎 (宮城)</b>
	「2位でバトンをもらって、100mを走る間に最下位まで転落しました。さらし者になるのは嫌だ…」子どもの言葉は心をえぐります。びびる気持ちをひた隠し、あの手この手で教材研究する日々が続いています。今回はバスケット・ソフトボール・性の多様性・リレー体育理論など、教材研究にまつわるエピソードを含めリアルに語ります。悩める人、大好きです。ぜひ私のぼろぼろになりながら教材研究に励んだ歴史を聞いて、元気を出してください。	

I	<p><b>これから性教育を学ぶ人のために</b> <b>篠田陽子 (東京)</b></p> <p>この講座では、性教育の必要性が言われ、それに共感しながらも、なかなか一歩が踏み出せないでいる方に、「性」教育に目覚めていく手がかりをつかんでほしいと思います。そのために1970年代から「性」教育実践をすすめてきた私自身の高校・大学での授業を紹介し、その時々々の課題を明らかにしつつ、これからの「性」教育の方向を探っていきましょう。</p>
J	<p><b>子どもが動き出す運動会</b> <b>安武一雄 (大阪)</b></p> <p>「運動会の主役は？」と聞くと「子どもたち」と多くの場合は返ってきます。では、「開会宣言はだれがやってる？」「選手宣誓はだれに向かって言ってる？」「児童会の言葉は子どもが本当に考えてる？」「児童会競技は毎年子どもが考えてる？」「講評は誰がしている？」等々、本当に「子どもが主役」を実現できているのかをチェックしていくと、「？」が付く場合も多いのではないのでしょうか。どんな運動会を目指すべきなのか、一緒に考えていきたいと思います。</p>
K	<p><b>子どもをわかること、子どもとわかること</b> <b>西田 佳 (東京)</b></p> <p>教員13年目、とある子との出会いから「子ども理解」の大切さを痛感しました。が、子どもを理解するのは本当に難しい。それはそうです、他人なのですから。他者をすべて理解しきることなんてできるわけがありません。しかし、教師として避けては通れないテーマでもあります。「子ども理解」って何だろう？ 試行錯誤の取り組みの様子を、国語の詩や物語文の授業実践、体育ではラグビーやボッチャの授業実践でお話しします。</p>
L	<p><b>ルーシーの「あなたのお悩み解決します」</b> <b>漆山昌博 (滋賀)</b></p> <p>「子どもが笑顔になる授業をしたいな…」教師なら誰もが持つ願いでしょう。ただ、その前にあなた自身は笑顔ですか。学校現場はある意味ブラックです。出口の見えない真っ暗なトンネルを独りで歩いていませんか。そこまで深刻でなくとも、理想の授業づくりと現実の間で苦しんでいませんか。愚痴を聞いてもらいながら明日への勇気が湧いてくるような場所はありますか。どんな些細な「悩み」でも、この講座にお持ちいただければ、真心込めて対応します。参加者みんなが温かい空間をつくってみませんか。</p>
M	<p><b>体育理論の授業が子どもの世界を変える</b> <b>伊藤嘉人 (愛知)</b></p> <p>体育理論（教室でする体育）の授業は、子どもたちの運動・スポーツが「できる」「できない」や「楽しさ」などの段階をこえる、新たなスポーツの世界を切り拓くきっかけとなります。また、教師自身も体育理論の授業を通して、「学校体育は何を教える教科であるか」と意味を問い直すことにもつながります。本講座で体育・スポーツの知識の「生きて働く」ものにする体育理論の授業について検討していきましょう。</p>
N	<p><b>若手企画② じっくり実践・S君との一年</b> <b>笹田哲平 (大阪)</b></p> <p>コミュニケーションでつまづいてしまうS君にとっては困難なことが多い学校生活。そんなS君との出会いから、支援学級担任としての葛藤や奮闘、そしてこれまでの子どもの成長を追った記録です。「跳び箱」という教材を通じて、身体表現する楽しさを覚えていくS君からは、誰しもが持っている“表現したい・見てもらいたい”という感情を再認識させられました。子どもの“願い”にどう寄り添うかについて熱く語らしましょう。</p>
27日午前	<p><b>実践力パワーアップ公開授業講座</b> <b>嶋 和正 (兵庫)</b></p> <p>「いっしょに授業を創りませんか」</p> <p>昨年度、小学校3、4年生を対象にして、初めて「タグ・ラグビー」の実践にチャレンジしました。そこで、今回はその教材づくり、授業づくりをどのようにしていったのか。「1時間目のオリエンテーション、そして、2時間目の授業へ」その一端を模擬授業風に行ってみます。参加希望の方は、事前に疑問や問いを知らせて頂くとさらに下準備ができて幸いです。</p> <p>(Eメール sowachan@hb.tp1.jp)</p>

**A～G…講座①…12/27 日午後**

**H～N…講座②…12/28 日午前**